

知覚された社会規範と社会的迷惑行為：記述的規範と命令的規範 の影響力に関する比較と規範－行動間の因果関係の検討

高木 彩*

Perceived Norms and Inconsiderate Public Behavior: A Study on the Differential Impact of Descriptive and Injunctive Norms, and of the Causal Relationship of Perceived Norms and Behavior

Aya TAKAGI*

This paper argues that the perceived descriptive norms are a better predictor of inconsiderate public behavior. Previous research has demonstrated that social norms need to be disaggregated into descriptive and injunctive norms to understand social behavior. The purpose of this two-part study is to find out whether either norm shapes inconsiderate behavior. In Study 1, 205 undergraduate students were asked to answer a questionnaire about perceived norms with respect to ten types of inconsiderate behavior. Analysis finds that descriptive norms were robustly associated with all three types of inconsiderate behavior. In contrast, perceived injunctive norms were significantly associated only with behavior regarding talking to others when it is not expected and under interpersonal settings. In Study 2, a longitudinal survey was conducted to clarify the causal relationship between the perceived social norms and inconsiderate public behavior. 236 undergraduate students were surveyed. The result supported the mutual influence hypothesis. The paper concludes that a model with descriptive norms predicted inconsiderate public behavior more effectively than did the one with injunctive norms.

key words: descriptive norm, injunctive norm, inconsiderate public behavior

問 題

社会的迷惑行為の増加が問題とされる時、その原因として行為者の規範意識の低下や、社会規範の軽視に言及することが多い。規範意識の低下や社会規範の軽視によって、人々が規範的行動を行わない結果、社会的迷惑行為が増加したという考え方である。これに基づけば、人々の規範意識や社会規範への理解が向上すれば、社会的迷惑行為は減少することが期待される。

本論文では、規範的行為の注目理論 (e.g., Cialdini,

Reno, & Kallgren, 1990) に基づき、社会規範を記述的規範と命令的規範に分け、両者が社会的迷惑行為とどのように関連をしているのかを検証する。

近年、社会規範を記述的規範と命令的規範に分類し、行動の予測力や影響過程を検証する試みが進められている (e.g., Cialdini et al., 1990)。社会規範を記述的規範 (descriptive norm) と命令的規範 (injunctive norm) に分類することは、規範的行為の注目理論として提案されている (Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991)。記述的規範には、そこで何がされているのかが明記され、その状況で何が効果的で適応的な行

* 千葉工業大学社会システム科学部金融・経営リスク科学科
Department of Risk Science in Finance and Management, Faculty of Social Systems Science, Chiba Institute of Technology,
2-17-1 Tsudanuma, Narashino-shi, Chiba, 2750016, Japan
e-mail: aya.takagi@it-chiba.ac.jp

為であるかを示すことで、行為を動機づける。なぜなら、「皆が行い、考え、信じているものは、そうすることが重要なものに違いない」と仮定することは、その状況下でどのように振る舞うかを選択する際に有利に働き、決定のショートカットをもたらすためである (Cialdini, 1988)。その動機づけは、同調を導く情報的影響 (Deutsch & Gerard, 1955) と類似する。もう一方の命令的規範には、何をすべきかが明記され、集団の道徳的ルールを構成する性質をもつ。命令的規範は、社会的報酬と罰により行為を動機づける。その動機づけは、同調を導く規範の影響 (Deutsch & Gerard, 1955) と類似する。

多くの場合、ルールとして奨励される行動は、多くの人々によって遵守されている。そのため、記述的規範と命令的規範は、同じ行動を志向している場合が多い。しかし、時には記述的規範と命令的規範が相反し、行動判断にコンフリクトが生じる状況が発生する。例えば、ゴミのポイ捨てを禁止するルールがありながら、ポイ捨てが蔓延している状況などがそれにあたる。この状況では、命令的規範はポイ捨て行動を禁止するのに対し、記述的規範はポイ捨てを奨励している。このような記述的規範と命令的規範が相反する行動を奨励する場面でも、社会規範を記述的規範と命令的規範に分けることにより、社会規範の影響についてより厳密な検証が可能となる (Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991)。

命令的規範と記述的規範への分類は、その他のさまざまな理論でも取り入れられている。二つの規範は、薬物使用 (McMillan & Conner, 2003)、ボランティア行動 (Warburton & Terry, 2000)、安全な性的行動 (White, Terry, & Hogg, 1994)、身体的エクササイズ (Norman, Clark, & Walker, 2005; Rohdes & Courneya, 2003) といった、多様な行動や行動意図に対し、それぞれ独立的に影響を与えることが報告されている。

しかしながら、記述的規範と命令的規範の、どちらが社会的迷惑行為のような反社会的行動を、効率的に抑制するのかは明らかでない。それは、社会規範の行動に対する予測力を検討する先行研究のうち、記述的規範と命令的規範の、一方のみを扱う研究が多いためである。研究間には、規範の種類以外にもさまざまな差異がある。そのため、研究知見の比較から、各規範の特徴を解明することに限界があ

り、記述的規範と命令的規範の両方を、一つの実証研究内で扱う必要がある。特に先行研究の知見から、記述的規範と命令的規範の行為に対する影響力を比較するには、以下のような問題がある。

第1に、研究によって社会規範を共有する社会的範囲が異なることであり、先行研究との比較を困難にしている。ある研究は、社会一般といった比較的広い範囲に設定し、それらの人々に支持される社会規範として、行動に対する影響を検証している (Rimal & Real, 2003)。それに対し別の研究では、「自分と同じ大学の学生」 (Christensen, Rothgerber, Wood, & Matz, 2004; Neighbors, Dillard, Lewis, Bergstrom, & Neil, 2006) や「親しい友人たち」 (Lee, Geisner, Lewis, Neighbor, & Larimer, 2007) といった、比較的少数の限定された人々のみに支持される、社会規範のインパクトを検証している。そうした社会規範を支持する、集団の規模や性質により、記述的規範と命令的規範の影響にそれぞれの程度違いが生じるのかは、現時点では結論が出ていない。それゆえに、先行研究の知見から、行動に対する社会規範の影響がどの程度強力なものなのかを述べることは難しい (Berkowitz, 2004)。

第2に、命令的規範と記述的規範の影響は、各規範が予測する対象行動の性質により異なる可能性がある。これは、社会規範はすべての社会行動を予測可能か、それともある条件を満たす特定の行動のみにかぎられるのかにかかわる問題であり、今後の検討課題の一つとされている (Schultz, Nolan, Cialdini, Goldstein, & Griskevicius, 2007)。このことも、記述的規範と命令的規範を、同一研究内で検証する研究が求められる一因と言える。そのため、本論文では、いくつかの行為別に命令的規範と記述的規範の影響力を検討する。

これらの社会規範の先行研究が抱える問題点を踏まえ、本論文では社会的迷惑行為の文脈から、社会規範の影響力を検討する。社会的迷惑行為の研究領域の中で、社会規範に関する研究の主な関心は、規範意識と社会的迷惑行為の関連に向けられてきた (e.g., 出口, 2003; 館, 1999)。これらの研究の規範意識は、社会規範が内面化されたものであり、内的な行動基準として機能する個人的規範 (Schwartz, 1973, 1977) に相当する。それに対し、本論文は、知覚された規範 (perceived norm) が行動に及ぼす影響

に焦点を当てている。知覚された規範は、多元的無知 (Prentice & Miller, 1993) の現象が示すように、実際の規範と異なった内容として知覚される場合が多々ある。それゆえ、多くの心理学者は社会規範自体よりも、知覚された規範が行動に及ぼす影響に関心を寄せてきた (Gockeritz, Schultz, Rendon, Cialdini, Goldstein, & Griskevicius, 2010)。そうした知覚された社会規範の影響を、記述的規範と命令的規範を分けて検討した研究は、まだごく少数にかぎられる (e.g., 北折, 2007)。それらの研究でも、迷惑行為者の記述的規範と命令的規範の知覚を測定し、社会的迷惑行為の実行頻度に与える影響を、一つの研究の中で扱ったものは見当たらない。そのため、社会的迷惑行為を対象とし、記述的規範と命令的規範を比較することは、記述的規範と命令的規範が予測可能な社会行動の特定と、社会的迷惑行為の低減方略の考案に寄与するという意義がある。

本論文では、二つの実証研究を行い、社会的迷惑行為における記述的規範と命令的規範の、知覚の影響力の差異を検討する。まず、記述的規範と命令的規範の両方の知覚を測定し、各社会的迷惑行為との関連を確認する。その上で、その関連性が社会規範の種類や対象行動である迷惑行為の種類により異なるのか、質問紙調査により検討する (研究 1)。次に、パネル調査により、記述的規範と命令的規範の知覚と社会的迷惑行為の因果関係を検討する。そして、社会規範の知覚が社会的迷惑行為の実行頻度に影響を与える因果関係を想定し、規範の影響力を用いた低減方略を検討することが妥当なことを確認する (研究 2)。これらの結果をもとに、社会規範の影響力を社会的迷惑行為の低減させるための活用方法を論じる。

研究 1 知覚された社会規範と 社会的迷惑行為との関連

問題

まず、社会規範の知覚と社会的迷惑行為の生起との関連について、社会規範を命令的規範と記述的規範とに分けて検討を行う。研究 1 では 10 の社会的迷惑行為を対象とし、行為者の社会規範の知覚が及ぼす影響を検証する。そして、記述的規範と命令的規範の知覚が、社会的迷惑行為の実行頻度に与える影響力に違いをもたらすのかを確認する。また、社

会的迷惑行為の種類により、記述的規範の知覚と命令的規範の知覚が行動頻度に与える影響力に違いがみられるかを、明らかにする。

記述的規範に関しては、多くの社会的迷惑行為の実行頻度を有意に説明するという仮説を検討する (仮説 1)。社会的迷惑行為は、迷惑と認知する他者の存在によりはじめて成立するため、周囲の状況への依存性が高い (原田, 2009)。それゆえに、記述的規範は、社会的迷惑行為に対して強力な予測因子であることが考えられる。つまり、周囲の人々がその社会的迷惑行為を頻繁に行っているという記述的規範を知覚するほど、回答者自身も社会的迷惑行為を行う頻度が高い傾向にあるだろう。

一方で命令的規範は、一部の社会的迷惑行為の実行頻度だけに影響し、実行頻度を予測する程度も、記述的規範に比べて小さいという仮説を検討する (仮説 2)。例えば、高木・村田 (2005) では、命令的規範への注目が発話に関する迷惑行為の低減に対し、有意な効果をもたらしていない。その他にも、記述的規範と命令的規範が相反する行為を奨励する場面 (例えば、自転車の放置など迷惑行為の禁止メッセージは掲示されているが、その場面では実際に多くの自転車が放置されている) では、記述的規範に即した行為がより多く観察されている (北折・吉田, 2000)。つまり、「周囲の人々は、その社会的迷惑行為を回答者が行うことを、良くないことだと考えている」という、社会的迷惑行為抑止の命令的規範は、回答者自身が社会的迷惑行為を抑制するか否かに関係していないと考えられる。

合わせて、社会的迷惑行為にかかわりがあり、社会規範の影響力に関し、第 3 変数として交絡する可能性のある変数として、迷惑認知を、行為者自身がその行動を迷惑と認知する程度 (自身迷惑認知) と、一般的に人はどの程度迷惑と認知するかの推測 (他者迷惑認知) に分けて測定する (工藤, 2002)。同様の理由から、同調傾向とナルシシズムについても検討する。

方法

調査対象者 大学生 205 名 (男性 124 名, 女性 81 名) であった。

調査用紙 本研究では、工藤・高木 (2006) と同じ社会的迷惑行為を使用した。具体的には、対人的迷惑行為 3 項目「何時だろうが気にせず友達に電話

をする」「事前に連絡しないで友達の家を訪問する」「あらかじめしていた友達との約束を直前にキャンセルする」、公共場面での迷惑行為3項目「空き缶や食べ物の袋などゴミを道ばたに捨てる」「人通りの多い歩道で数人で横に並んで歩く」「授業中に携帯電話を鳴らす」、発話に関する迷惑行為4項目「図書館で声の大きさを気にせずにおしゃべりする」「授業中の教室の前の廊下でおしゃべりする」「授業中に私語をする」「電車の中で大きな声でおしゃべりする」であった。これらの対象行動について、以下の質問に回答を求めた。

- (1) 社会的迷惑行為の実行頻度：「あなたは以下のような行動をすることがありますか」という問いに対して「1：全くしない～7：非常によくする」の7件法で回答を求めた。
- (2) 記述的規範の知覚：「あなたの周りの人々は以下のような行動をどの程度頻繁に行っていますか」という問いに対して「1：行っていない～7：頻繁に行っている」の7件法で回答を求めた。
- (3) 命令的規範の知覚：「あなたの周りの人々は、以下の行動をあなたがとると、それをどの程度「良くないことだ」と考えると思いますか」という問いに対して「1：全くそう考えていない～7：非常に「良くないことだ」と考えている」の7件法で回答を求めた。

その他の変数に関しては以下の通りに回答を求めた。自身迷惑認知は「あなた個人が各行動をどの程度「迷惑」と感じますか」という問いに対して「1：感じない～7：非常に感じる」の7件法で回答を求めた。他者迷惑認知：「一般的に人はどの程度「迷惑だ」と感じると思いますか」という問いに対して「1：感じない～7：非常に感じる」の7件法で回答を求めた。同調傾向（ライフデザイン研究所、1996）については、「できるだけ仲間と同じように行動したい」「何をするにしても皆と一緒だと安心する」「仲間はずれにされるのは絶対にイヤだ」「流行にいくれるのはイヤだ」の4項目に5件法で回答を求めた。NPI尺度（Narcissistic Personality Inventory；大石・福田・篠置、1987）については、既存の54項目を提示し、強制選択法で回答を求めた。

手続き 講義時間を利用し、一斉に調査を実施した。

結果

記述統計量 社会規範の知覚と社会的迷惑行為全般との関連を検討するにあたって、社会的迷惑行為の頻度10項目の平均得点を算出し、それを指標として用いた（ $\alpha=.76$ ）。同様に記述的規範の知覚（ $\alpha=.84$ ）、命令的規範の知覚（ $\alpha=.89$ ）、自身迷惑認知（ $\alpha=.81$ ）、他者迷惑認知（ $\alpha=.88$ ）に関しても10項目の平均得点をもって分析を行った。同調傾向（ $\alpha=.73$ ）に関しても5項目の平均得点を用いたが、NPI（ $\alpha=.85$ ）に関しては強制選択という尺度の性質上、合計得点をもって以下の分析を行った。

なお、記述的規範と命令的規範の指標に関しては、どちらの規範も得点が高いほど、対象行動を行うことに賛成する、社会的迷惑行為支持の規範を知覚しているように、得点化を行った。すなわち、記述的規範の知覚に関する得点が低い場合、「周囲に当該行動を行っている人が少ない」と知覚していることを意味する。命令的規範の知覚に関する得点が低い場合、当該行動について、周囲の他者は望ましくないと強く認知している。その結果、本研究で扱った社会的迷惑行為に関しては、自他ともに行為を迷惑と感じていると認識されていること（自身迷惑認知 $M=5.29$ ($SD=0.86$)；他者迷惑認知 $M=5.53$ ($SD=0.83$))、それらの行為を自身が行う頻度はそれほど高くないものの、全く皆無ではないこと（ $M=2.68$ ($SD=0.86$))が伺える。また、以下のTable 1のとおり、相関分析の結果から、記述的規範と命令的規範の間には相関がないことが確認された（ $r(204)=.07, ns$ ）。合わせて、記述的規範と命令的規範と迷惑行為の実行頻度間の相関に対し、その他の変数（迷惑認知、同調傾向、NPI）が交絡している可能性を確認するため、これらの変数を制御変数として偏相関係数を算出した。その結果、記述的規範と実行頻度間の偏相関は、ゼロ次の相関と大きく異なる値を示したものはなかった。また、命令的規範に関しては自身迷惑認知を制御変数としたときのみ、ゼロ次で有意だった相関（ $r=.29, p<.001$ ）が、偏相関では有意ではなくなった（ $r=.08, ns$ ）¹⁾。この例外を除き、その他の結果は、本研究で合わせて測定した

¹⁾ この結果は、命令的規範と社会的迷惑行為の実行頻度とのゼロ次の相関は、自身迷惑認知と実行頻度間の相関によって有意であったことを示唆する。すなわち、この分析結果もまた、命令的規範と社会的迷惑行為との関連性は、記述的規範に比べて弱いとする本論文の仮説の傍証といえるだろう。

Table 1 各変数の平均値、標準偏差と相関係数

		M	SD	I	II	III	IV	V	VI
I	行動頻度	2.68	0.86						
II	記述的規範	3.77	1.04	.47***					
III	命令的規範	3.19	1.03	.29***	.07				
IV	自身迷惑認知	5.29	0.86	-.46***	-.02	-.49***			
V	他者迷惑認知	5.53	0.83	.06	.02	-.41***	.42***		
VI	同調傾向	3.10	0.78	.32***	.16*	.05	-.09	-.01	
VII	NPI	20.10	8.50	.05	.03	-.01	-.03	.08	-.16*

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 2 社会的迷惑行為の実行頻度を従属変数とした重回帰分析結果

	発話に関する迷惑行為	対人的迷惑行為	公共場面での迷惑行為
記述的規範	.42***	.40***	.31***
命令的規範	.14*	.15*	.01
自身迷惑認知	-.41***	-.30***	-.44***
他者迷惑認知	.22***	.14*	.12
同調傾向	.19**	.07	.20**
NPI	-.02	.14	.06
Adjusted R ²	.45***	.40***	.35***

注) 値は標準偏回帰係数

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

変数によって各社会規範の影響力と交絡していないことが確認された。

社会的迷惑行為の分析 社会規範と社会的迷惑行為の関連を、社会的迷惑行為の種類別に重回帰分析で検討した。分析では社会的迷惑行為を、対人的迷惑行為 ($\alpha = .67$, $r(205) = .26 \sim .51$, $p < .001$), 発話に関する迷惑行為 ($\alpha = .69$, $r(203) = .30 \sim .47$, $p < .001$), 公共場面における迷惑行為 ($\alpha = .45$, $r(205) = .20 \sim .26$, $p < .001$) に分けて平均得点を算出し、それらを合成指標として使用した。なお、対人的迷惑行為に関しては、他の項目との相関が低かった「あらかじめしていた友達との約束を直前にキャンセルする」を除外し、残りの2項目で合成指標を作成した。その上で、各変数が各迷惑行為の頻度に及ぼす効果を、重回帰分析(強制投入法)にて検討した(Table 2)²⁾。

発話に関する迷惑行為については、記述的規範の知覚、命令的規範の知覚、自身迷惑認知、他者迷惑認知、同調傾向の効果が有意であった。つまり、頻

繁に他者が行っていると知覚しているときや、他者が迷惑に思うときはおしゃべりをし、自分が迷惑に思うときや、他者が望ましくないと見なしているときには、おしゃべりをしない。また、同調傾向にある人ほど、発話に関する迷惑行為をとるということであった。

対人的迷惑行為については、記述的規範の知覚、命令的規範の知覚、自身迷惑認知、他者迷惑認知の効果が有意であった。つまり、頻繁に他者が行っていると知覚しているときや、自分が迷惑に思っていないとき、他者が望ましくないとみなしたり、他者が迷惑に思うときには、その対人的迷惑行為をするということであった。

公共場面での迷惑行為については、記述的規範の知覚、自身迷惑認知、同調傾向の効果が有意であった。命令的規範の知覚、ナルシズムには有意な効果は認められなかった。つまり、頻繁に他者が行っていると知覚していると、公共場面での迷惑行為を

²⁾ この結果が多重共線性によって生じている可能性も検討したが、すべての独立変数において VIF (Variance Inflation Factor) は 2.0 を超えず、多重共線性が生じているとは言えなかった。

するということであった。反対に、自身が迷惑に思わないときや、行為者の同調傾向が高いときには、より公共場面での迷惑行為をするということであった。この結果は、公共場面の迷惑行為が他の社会的迷惑行為とは異なり、命令的規範の知覚の影響を受けていないことを示している。

考察

各規範の知覚と社会的迷惑行為との関連を検討した結果、総じて記述的規範の知覚が、社会的迷惑行為の生起に及ぼす効果は、命令的規範のそれに比べて大きかった。また、周囲の人々が頻繁に行っているという、社会的迷惑行為を支持する記述的規範を知覚するほど、知覚者自身もその社会的迷惑行為を行っていた。そして、記述的規範の知覚の影響は、行動の種類に関係なく認められた。また、迷惑行為を支持しない命令的規範を知覚するほど、その社会的迷惑行為をしないことが示唆された。ただし、命令的規範の知覚の抑制効果は、社会的迷惑行為の種類によって異なっていた。命令的規範の知覚は、対人的迷惑行為や発話に関する迷惑行為に影響を及ぼしていたが、公共場面での迷惑行為には影響を与えていなかった³⁾。

社会的迷惑行為に対し、その行為を奨励する内容として社会規範が知覚されたとき、記述的規範が社会的迷惑行為を促進するという意味で、強い負の効果をもっていた。このことは、先行研究が扱ってきた過度な飲酒やギャンブルに比べ、社会的迷惑行為の場合は、同じ行為でも状況次第で迷惑と認知される時とそうでない時があるといった、状況依存性の高さが影響していると考えられる。他方で、命令的規範に関しては、社会的制裁を実際に受ける予期が低かったため、社会的迷惑行為を抑制する働きをもたなかったのかもしれない。特に、命令的規範の有

意な効果が確認されなかった、公共場面における社会的迷惑行為は、行為者と日常生活で接点がない未知者が、その認知者となる可能性が高い。そのため、今後認知者から否定的フィードバックを受ける可能性は、未知者であればさらに低まる。そのため、例えばゴミを道ばたに捨てることを目撃した他者から、批判されるような望ましくない評価が予期されても、それが社会的迷惑行為をやめる動機づけには結びつかないだろう。

研究2：社会規範の知覚－行動間の因果関係に関する縦断的検討

問題

研究1の結果から、社会規範といっても命令的規範、記述的規範とでは、規範の知覚が行動に及ぼす影響力が異なることが確認された。記述的規範の知覚に関しては、行動頻度の間に密接な関連が確認されているのに対し、命令的規範の知覚は、一部の迷惑行為においてのみ、実行頻度への影響が確認された。

ただし、社会規範の影響力を検討した先行研究の多くは、研究1のような横断的調査研究であり、記述的規範と命令的規範の知覚と行動間の因果関係は、十分な検討がなされていない。果たして本当に、記述的規範の知覚と行動との間に認められた関連は、人々が記述的規範の影響を色濃く受けていることを意味しているのだろうか。規範の知覚が対象行動に影響したという因果関係だけでなく、行動が規範の知覚に影響したという、逆の因果関係も想定可能である。例えば、フォルス・コンセンサス効果 (Ross, Greene, & House, 1977) や、フォルス・ユニークネス効果 (Suls, Wan, Sanders, 1988) といった現象は、行為者自身の行動と整合的な内容に、社会規範

³⁾ 本論文が主たる検討対象とする社会規範の変数と合わせて検証を行った周辺の変数が与える示唆は、以下の通りであった。迷惑認知の変数に関しては、自分自身が迷惑と認知する程度と、一般にその行為が迷惑とみなされる程度は、実行頻度に影響を与える程度に違いがあることが確認された。先行研究では分けた迷惑認知の議論はされてこなかったが、両者は規定因として考える際には分けて議論する必要性を示している。また、同調傾向は発話場面と公共場面の迷惑行為のみに有意に影響を与え、対人場面の迷惑行為には影響が認められなかった。これは、対人的迷惑行為は行為者が1名にかざられる場合が多いために、同調傾向の影響が出なかったものと考えられる。NPIに関しては、いずれも社会規範の変数間との相関も有意ではなかった。このことは、NPIとの関係が議論されている攻撃行動や対人葛藤 (e.g., 大淵, 2003) と社会的迷惑行為は、同じ反社会的行動であっても、その規定因は異なることを示唆している。以上の周辺的に検討した変数は、各社会規範と実行頻度の偏相関分析を行った結果からも、いずれも命令的規範と記述的規範が社会的迷惑行為に与える影響力の比較や因果関係の検討には、直接的にかかわりをもたない可能性が示唆されたため、以降ではこれらの変数への言及は割愛する。

の知覚を変えることを示している。これらの現象は、行為者の行動が先行し、自身の行動を参照して、他者の行動推測がされうること示唆する。そのため、知覚された社会規範と行動頻度の間に見られた関係は、その行為者の行動をもとに、自身の行動を奨励する方向に知覚する認知傾向によるものであって、それに即した記述的規範や命令的規範が知覚されることを、ただ示しただけに過ぎないという説明もできる。

そのため研究2では、Neighbors et al. (2006) にならい、縦断的調査を実施し、規範の知覚と行動の関連について、因果関係と予測力の観点から検討を行う。知覚された規範と行動の予測力は、一方が他方よりも予測力が大きい可能性と、両者が等しく互いに予測力をもつ可能性が考えられる。本論文では、知覚された規範が行動頻度に与える影響が有意であるという仮説を検証する。そしてその影響力は、行動頻度がその後の知覚された規範に与える影響の大きさと同じか、それ以上であると予測する。

方法

調査対象者 中京地区にあるK大学の学生（女性236名）を対象に実施した。なお分析の対象となったのは、1回目の調査（Time 1）と2回目の調査（Time 2）の両方に回答した160名であった。

調査用紙 本研究では、ゴミ捨てに関する迷惑行為2項目「空き缶や食べ物の袋などのゴミを道端に捨てる」「ゴミを分別しないでゴミ箱に捨てる」、電車内の迷惑行為2項目「電車内で化粧をする」「電車内でお年寄りや体の不自由な人に席をゆずらない」、発話に関する迷惑行為2項目「授業中に私語をする」「授業の教室の前の廊下でおしゃべりする」の六つの行動を対象とした。なお、研究2では、社会的迷惑行為の中でも、迷惑行為の認知者が比較的多く、体系的な低減方略への社会的ニーズが高いと考えられる行為を扱ったため、研究1で扱った「対人的迷惑行為」は割愛した。そしてこれらの行動に関し、以下の質問にTime 1、Time 2の各回で回答を求めた。

(1) 社会的迷惑行為の実行頻度：「あなた自身はこの1カ月間に以下のような行動をすることがありましたか」という問いに対して「1：全くしなかった～5：よくした」の5件法で回答を求めた。

(2) 記述的規範の知覚：「K大学の典型的な学生はこの1カ月間に以下のような行動をどの程度頻繁に行っていたと思うか」、「あなたの親しい友人達は、この1カ月間に以下のような行動をどの程度頻繁に行っていたと思いますか」という2項目に対してそれぞれ「1：全くしなかった～5：よくした」の5件法で回答を求めた。

(3) 命令的規範の知覚：「多くのK大学の学生は以下のような行動をどのように考えていると思いますか」、「あなたの親しい友人達は以下のような行動をどのように考えていると思いますか」という2項目に対してそれぞれ「1：非常に賛成～7：非常に反対」の7件法で回答を求めた。

合わせて、自身迷惑認知については、「以下のような行動をあなた個人はどの程度「迷惑だ」と感じますか」という問いに対して「1：全く感じない～7：非常に感じる」の7件法で回答を求めた。他者迷惑認知については、「以下のような行動をK大学の典型的な学生はどの程度「迷惑だ」と感じると思いますか」という問いに対して「1：全く感じない～7：非常に感じる」の7件法で回答を求めた。その他に、大学への登校頻度（4件法）、電車の利用頻度（4件法）等に回答を求めた。

手続き 講義時間を利用し、一斉に調査を実施した。Neighbors et al. (2006) と同様に、Time 1実施から2カ月後にTime 2を実施した。

結果

Time 1 (T1)、Time 2 (T2) 各回の行動頻度6項目について、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を実施した。固有値の減衰状況（Time 1: 2.03→1.14→0.89→0.87、Time 2: 2.10→1.16→0.96→0.79）と解釈可能性から、2因子構造とした（Table 3）。T1、T2とも、類似した構造が確認され、どちらも発話に関する迷惑行為2項目に負荷量が高い因子と、ゴミ捨てに関する迷惑行為や電車内の迷惑行為に関する残りの4項目に負荷量が高い因子にまとまったため、社会的迷惑行為6項目を「発話に関する迷惑行為」と「公共場面での迷惑行為」とに分け、その分類された項目の平均値を合成指標として用い、以後分析を行った。

知覚された規範と行動頻度の相関分析 知覚された規範と行動頻度の因果関係、およびその影響力を検討するため、T1の知覚された規範とT2の行動頻

Table 3 社会的迷惑行為の実行頻度に関する因子分析結果

	Time1			Time2		
	F1	F2	共通性	F1	F2	共通性
発話に関する迷惑行為	($\alpha = .65$)			($\alpha = .65$)		
授業の教室の前の廊下でおしゃべりをする	.84	-.09	.65	-.02	.70	.48
授業中に私語をする	.56	.13	.39	.10	.69	.51
公共場面での迷惑行為	($\alpha = .49$)			($\alpha = .48$)		
空き缶や食べ物の袋などのゴミを道端に捨てる	-.12	.63	.35	.96	-.12	.90
電車内で化粧をする	.19	.43	.29	.31	.26	.19
ゴミを分別しないでゴミ箱に捨てる	.02	.38	.15	.33	.29	.23
電車内でお年寄りや体の不自由な人に席をゆずらない	.11	.32	.14	.23	.15	.09
累積説明率 (%)	23.60	32.80		25.97	39.96	
因子間相関	1.00			1.00		
	.39	1.00		.18	1.00	

度の相関, T1 の行動頻度と T2 知覚された規範の相関の比較を行った。分析では Neighbors et al. (2006) と同様の手順を採用した⁴⁾。分析は Amos Ver.19.0 を使用し, T1 と T2 両時点の, 知覚された規範と行動頻度間のすべてに相関関係を想定した飽和モデルと, 差異があるのかを検討したい変数間の相関係数に, 等値制約を課したモデルを作成した。そして, この等値制約を課したモデルの適合度に, 有意な低下が見られたかを χ^2 検定により評価した。 χ^2 検定の結果が有意となれば, 適合度低下の理由は, 等値制約を課したこと以外にありえず, 該当箇所の相関係数が有意に異なることを意味する。以上の方法により, 比較対象とした二つの相関係数が有意に異なっていたかを検討した。

発話に関する迷惑行為 「知覚された規範が行動頻度に与える影響」と「行動頻度が知覚された規範に与える影響」を検討するため, 相関係数を確認したところ, T1 知覚された規範と T2 行動の相関 ($r = .43, p < .001$), T1 行動と T2 知覚された規範の相関 ($r = .34, p < .001$) はともに有意であった。したがって, 発話に関する迷惑行為においては, 「知覚された規範が行動頻度に与える影響」と, 「行動頻度が知覚された規範に与える影響」の, 双方向の因果関係が存在することが確認された (Figure 1)。次

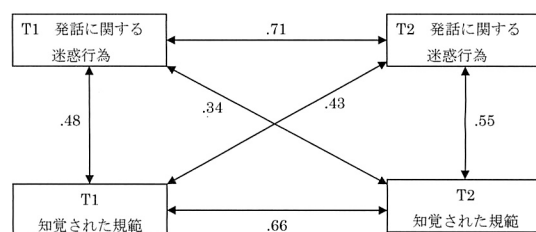


Figure 1 発話に関する迷惑行為と社会規範の相関係数

に, 飽和モデルと, 上記の相関係数の部分にのみ等値制約を課したモデルの適合度を検討した。その結果, 等値制約を課した後も χ^2 値は有意ではなかった ($\chi^2(1) = 0.83, ns$)。したがって, どちらの影響も, その影響の大きさに有意な違いはないことが明らかとなった。

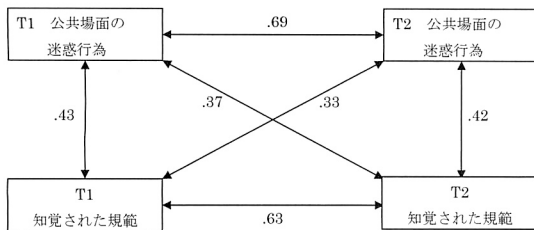
さらに, 知覚された規範に関して, 記述的規範と命令的規範とに分け, 同様の分析を行ったが, 規範の種類による差異は認められなかった (Table 4)。

公共場面での迷惑行為 公共場面での迷惑行為においても, 発話に関する迷惑行為と同様の結果が確認された。T1 知覚された規範と T2 行動の相関 ($r = .33, p < .001$), および T1 行動と T2 知覚された規範の相関 ($r = .37, p < .001$) は有意であった。したがって, 公共場面での迷惑行為に関しても, 「知覚された規

⁴⁾ パネル調査で因果関係の検討を行う際には, Time1 の変数から Time2 の変数に単方向のパスを用いたモデル (交差遅れ効果モデル (Finkel, 1995)) を用いた分析方法がより一般的である。しかし, 研究 2 では, 検討対象のパス係数 (相関係数) の大きさが有意に異なるかも含めた検討を目的としており, それは Neighbors et al. (2006) を用いないと検証が困難であるため, Neighbors et al. (2006) の分析手順に沿った検討を行った。

Table 4 規範別の迷惑行為と知覚された規範の相関係数とその差

	相関係数	χ^2 値
発話場面での迷惑行為		
(T1 行動) (T2 記述的規範)	.43***	0.53 <i>ns</i>
(T1 記述的規範) (T2 行動)	.52***	
(T1 行動) (T2 命令的規範)	.19*	0.68 <i>ns</i>
(T1 命令的規範) (T2 行動)	.26**	
公共場面での迷惑行為		
(T1 行動) (T2 記述的規範)	.38***	0.01 <i>ns</i>
(T1 記述的規範) (T2 行動)	.39***	
(T1 行動) (T2 命令的規範)	.28***	2.02 <i>ns</i>
(T1 命令的規範) (T2 行動)	.19*	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ **Figure 2** 公共場面での迷惑行為と社会規範の相関係数

規範が行動頻度に与える影響」と、「行動頻度が知覚された規範に与える影響」の、双方向の因果関係の存在が確認された (Figure 2)。次に、飽和モデルと、上記の相関係数の部分にのみ、等値制約を課したモデルの適合度を検討した。その結果、等値制約を課した後も、 χ^2 値は有意ではなかった ($\chi^2(1)=1.10$, ns)。したがって、どちらの影響も、その影響の大きさに有意な違いはないことが明らかとなった。

また、知覚された規範を記述的規範と命令的規範に分けた分析でも、規範の種類による差異は認められなかった (Table 4)。

媒介分析 上記の相関分析では、T1 の指標から T2 の指標に対する直接的な影響のみを検討した。それゆえ、例えば T1 の知覚された規範と T2 の行動頻度の有意な相関は、T1 の行動頻度が媒介しているのか、といった T1 の変数間 (知覚された規範と行動頻度の間) の相関関係を考慮に含めた検討ができていない。そのため、媒介分析 (Baron & Kenny, 1986) により、T1 の変数が媒介変数として影響する可能性を検討した。その結果、発話に関する迷惑行為では、T1 の行動頻度を統制したときに、T1 知覚

された規範から T2 の行動頻度へのパスは有意ではなくなった (統制前 $\beta = .43$, $p < .001$, 統制後 $\beta = -.12$, ns)。また、T1 の行動頻度から T2 の知覚された規範へのパスについても、T1 の知覚された規範を統制した後は、有意ではなくなった (統制前 $\beta = .34$, $p < .001$, 統制後 $\beta = .03$, ns)。

公共場面での迷惑行為に関しても同様の分析を行ったところ、いずれも媒介変数の統制後には、標準偏回帰係数は有意ではなくなった。T1 の行動頻度を統制した後は、T1 の知覚された規範から T2 行動への効果は有意ではなくなった (統制前 $\beta = .33$, $p < .001$, 統制後 $\beta = .04$, ns)。そして、T1 の知覚された規範を統制した後は、T1 行動から T2 社会規範への効果は有意ではなくなった (統制前 $\beta = .40$, $p < .001$, 統制後 $\beta = .12$, ns)。

つまり、どの社会的迷惑行為においても、知覚された規範がその後の行動頻度に与える影響は、同時点の変数が媒介していることが明らかとなった。すなわち、T1 の知覚された規範は、T1 行動を介して T2 の行動に影響を与えていた。T1 の行動も同様に、T1 の知覚された規範を介して、T2 の知覚された規範に影響していた。つまり、規範から行動への影響は、T1 で社会的迷惑行為の奨励を知覚した人ほど、T1 でその社会的迷惑行為を行う頻度が高く、その頻度の高さに T2 の社会的迷惑行為の実行頻度は連動していた。そして、行動から規範への影響関係についても、T1 で社会的迷惑行為を行う頻度が高いほど、T1 で社会的迷惑行為を奨励する規範を知覚しており、その規範の知覚と、T2 の規範の知覚は連動していた。

考察

知覚された規範と行動頻度との関連を、縦断的調査により検討したところ、社会的迷惑行為や規範の種類に関係なく、T1 の知覚された規範と T2 の行動頻度の相関関係と、T1 の行動頻度と T2 の知覚された規範に、有意な相関が見られた。また、この二つの相関係数の大きさに、有意な差がないことも合わせて確認された。したがって、知覚された規範と行動頻度は、相互に同程度の影響を及ぼし合っていることが明らかとなった。そして、媒介分析結果から、知覚された規範の影響は、同時点の行動頻度を介し、その後の行動頻度に作用していることが示された。行動頻度もまた、同時点の規範への知覚を媒

介し、その後の規範の知覚に影響を与えていた。上記の結果は、本研究を実施するにあたって参照した、Neighbors et al. (2006) が言うところの相互影響仮説 (mutual influence hypothesis) を支持するものであった。相互影響仮説とは、規範の知覚が行動頻度に影響を与える関係性と、行動頻度が規範の知覚に影響を与える関係性の、両方の存在を想定した仮説である。彼らの研究では、当該仮説を支持する結果を得ており、研究2もこれを支持していた。また研究2では、Neighbors et al. (2006) では未検討だった命令的規範に関しても社会規範と行動頻度の影響関係を検討した。その結果、規範の種類による差異は認められず、各社会規範と社会的迷惑行為との因果関係は、どちらも相互影響仮説で説明できることを本研究で新たに明らかにした。

以上の結果は、研究1で確認された規範と行動の実行頻度との関連について、単に行動が規範の知覚に影響を与えただけとは説明できない。社会の人々が、対象行動にどのような意見をもち、実際に行動しているかといった社会規範の知覚が、知覚者の行動頻度に影響していることを意味する。そのため、社会規範アプローチ (Perkins, 2003) が主張する通り、反社会的方向へ不正確に誤って規範が知覚されている場合には、実際の規範情報を提示して、より正確に社会規範を知覚させることで、迷惑行為の抑制を促すアプローチが可能なことを示唆している。

総 合 考 察

研究1では10の社会的迷惑行為を対象とし、記述的規範と命令的規範の知覚が、各行動の実行頻度を与える影響を検討した。重回帰分析を行った結果から、記述的規範の知覚に関して、対象行動の種類にかかわらず、どの社会的迷惑行為の実行頻度についても有意に説明をしていることが確認された。つまり、周囲の多くの人が頻繁に行っているという、当該行動を是認する記述的規範を知覚するほど、知覚者自身も当該行動を頻繁に行うことが明らかとなった。

それに対して命令的規範の知覚は、一部の行為の実行頻度のみに関連性を与えていた。すなわち、周りの多くの人が当該行動を行うことに反対し、他者にもすべきでないという期待する程度は、知覚者自身の行動頻度に必ずしも反映されていなかった。

この傾向が、公共場面での迷惑行為において顕著に認められたことも興味深い。また、相関分析で命令的規範と行動間に有意な相関関係が認められていても、重回帰分析では、命令的規範から行動に対する標準偏回帰係数は有意ではなかった。このような結果からも、社会的迷惑行為に対する命令的規範と記述的規範の影響力を比較した場合には、記述的規範の方がより大きいといえる。

記述的規範と命令的規範では、社会的迷惑行為との関連性になぜこうした差異が認められたのか。これに関しては、逸脱行為などに比べ、社会的迷惑行為の悪質性は低いことが、その理由として考えられる。そもそも社会的迷惑行為は、報酬刺激とともに罰刺激を受ける機会也非常に少ない。それゆえに、命令的規範が行動にインパクトを与えにくいと考えられる。その他にも、行為が社会的迷惑とみなされるかどうかは、どのような状況で行われたかによって大きく異なる。このことが、記述的規範により目が向けられやすい理由の一つであろう。

研究2では、研究1で認められた規範の知覚と迷惑行為の関係を検証すべく、縦断的検討を行った。その結果、社会的迷惑行為においても、社会規範の知覚と行動間で、相互に影響しあっていることが明らかとなった。加えて、先行研究で未検討であった、命令的規範の知覚と行動頻度の関係を検証し、命令的規範もまた、行動とは相互影響関係にあることを明らかにした。

本論文の結果から、社会的迷惑行為の低減方略に対しては、以下のことが示唆される。第一に、命令的規範は社会的迷惑行為の低減に効果を発揮しない場合が、少なからずあるということである。本研究では、命令的規範を社会的迷惑行為の低減に用いることの有効性が、ほとんど支持されなかった。このことは、高木・村田 (2005) における、命令的規範が「発話にかかわる迷惑行為」を低減させなかったという結果が、その他の社会的迷惑行為にも広範にあてはまることを意味する。

第二に、命令的規範よりもむしろ、記述的規範の影響力を考慮することの重要性が挙げられる。社会的迷惑行為のように、社会的に望ましくない行動の抑止方略を考える中で、記述的規範の影響力やその活用は、あまり検討されていない。だが、希少な記述的規範を扱った先行研究の知見は、本論文と同様

に記述的規範からのアプローチの有効性を支持している。例えば、北折 (2007) は、歩行者の信号無視行動場面を取り上げ、現場研究により記述的規範の影響を検証し、行動判断への記述的規範の強い影響力を確認している。そして、信号無視行動場面では、「記述的規範が“止まれ”の行動を指示する場合においてのみ、歩行者は赤信号を意識し、周囲の他者を気にするような認知や感情が喚起され、命令的規範が優位になることが明らかにされた (p. 51)」とある。これらの結果は、記述的規範の強い影響力だけでなく、命令的規範は、同一行動を奨励する記述的規範が存在してこそ、初めて顕現的となることを示唆する。裏を返せば、命令的規範単独では、社会的迷惑行為に影響力をもちにくいとも言える。

他にも、油尾・吉田 (2009) では、前もって命令的規範への順守に感謝を示すという「感謝メッセージ」が、社会的迷惑行為を抑制することを示した。しかし、記述的規範と命令的規範が一致していない時には、その抑制効果は低減した。つまり、感謝メッセージが抑止効果を発揮するためには、迷惑行為者が命令的規範と同様に、社会的迷惑行為の抑止を奨励する記述的規範を知覚することが重要性である。

そのため、実践的示唆としては、命令的規範として「～をしてはならない」というルールを理解を促すより、当該の社会的迷惑行為の蔓延を防ぐ方が、より効率的と考えられる。例えば、ゴミのポイ捨て問題であれば、ポイ捨てが少ない段階からゴミの収集を怠らず、ポイ捨てされているゴミがない状況を保つことである。放置自転車の問題であれば、わずかな台数でもすぐに撤去し、自転車が放置されていない道路環境を維持することが有効だろう。

これらの取り組みは、社会的迷惑行為が蔓延する前であれば有効である。しかし、すでに社会的迷惑行為が蔓延してしまっており、誰の目からもそれが明白な状況であることも多々ある。つまり、社会的迷惑行為を奨励する記述的規範が、すでに形成されてしまった状況である。このような場合、記述的規範や命令的規範の影響力を用い、どのような低減策を講じたらよいのか。その問いに答えるためには、社会規範の調整要因 (e.g., Rimal, Lapinski, Cook, & Real, 2005) を含め、さらなる社会規範の影響過程に関する検討が必要である。今後の重要な研究課題の

一つであろう。

引用文献

- Baron, R. M. & Kenny, D. A. 1986 The moderator-mediator variable distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1173-1182.
- Berkowitz, A. D. 2004 The social norms approach: theory, research, and annotated bibliography. http://www.alan-berkowitz.com/articles/social_norms.pdf
- Christensen, P. S., Rothgerber, H., Wood, W., & Matz, D. C. 2004 Social norms and identity relevance: A motivational approach to normative behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 1295-1309.
- Cialdini, R. B. 1988 *Influence: Science and practice* (2nd ed.). Glenview, IL: Scott, Foresman.
- Cialdini, R. B., Kallgren, C. A., & Reno, R. R. 1991 A focus theory of normative conduct: A theoretical refinement and reevaluation of the role of norms in human behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 24, pp. 204-234). New York: Academic Press.
- Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. 1990 A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 1015-1026.
- 出口拓彦 2003 大学生の私語と規範意識および社会的スキル・視点取得との関連 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 380.
- Deutsch, M. & Gerard, H. B. 1955 A study of normative and informational social influence upon individual judgment. *Journal of Abnormal and social psychology*, **51**, 629-636.
- Finkel, S. 1995 *Causal analysis with panel data*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Gockeritz, S., Schultz, P. W., Rendon, T., Cialdini, R. B., Goldstein, N. J., & Griskevicius, V. 2010 Descriptive normative beliefs and conservation behavior: The moderating roles of personal involvement and injunctive normative beliefs. *European Journal of Social Psychology*, **40**, 514-523.
- 原田知佳 2009 自己制御と社会的迷惑行為 吉田俊和・齋藤和志・北折充隆 (編) 社会的迷惑の心理学, 75-91.
- 北折充隆・吉田俊和 2000 記述的規範が歩行者の信号無視行動におよぼす影響 社会心理学研究 **16**, 73-82.
- 北折充隆 2007 社会規範からの逸脱行為に関する心理学的研究 風間書房
- 工藤恵理子 2002 寮生調査報告—寮生と非寮生の比

- 較一 青山学院女子短期大学総合文化研究所年報, **10**, 71-101.
- 工藤恵理子・高木 彩 2006 社会的迷惑行動における自己中心的認知バイアス 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 470-471.
- Lee, C., Geisner, I. M., Lewis, M. A., Neighbors C., & Larimer, M. E. 2007 Social motives and the interaction between descriptive and injunctive norms in college student drinking. *Journal of Studies on Alcohol and Drugs*, **68**, 714-721.
- ライフデザイン研究所 1999 若者の規範意識に関する調査 LDI REPORT vol.1, 5-28.
- McMillan, B. & Conner, M. 2003 Applying an extended version of the theory of planned behavior to illicit drug use among students. *Journal of Applied Social Psychology*, **33**, 1662-1683.
- Neighbor, C., Dillard, A. J., Lewis, M. A., Bergstrom, R. L., & Neil, T. A. 2006 Normative misperceptions and temporal precedence of perceived norms and drinking. *Journal of Studies on Alcohol*, **67**, 290-299.
- Norman, P., Clark, T., & Walker, G. 2005 The theory of planned behavior, descriptive norms, and the moderating role of group identification. *Journal of Applied Social Psychology*, **35**, 1008-1029.
- 大淵憲一 2003 満たされない自己愛—現代人の心理と対人葛藤 ちくま新書
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 1987 ナルシシズムの人格の基礎的研究 (1)—ナルシシズムの人格目録の信頼性と妥当性について 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535.
- Perkins, W. H. (Ed.) 2003 *The social norms approach to preventing school and college age substance abuse: A handbook for educators, counselors, and clinicians*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Prentice, D. A. & Miller, D. T. 1993 Pluralistic ignorance and alcohol use on campus: Some consequences of misperceiving the social norm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 243-256.
- Rimal, R. N., Lapinski, M. K., Cook, R. J., & Real, K. 2005 Moving toward a theory of normative influences: How perceived benefits and similarity moderate the impact of descriptive norms on behaviors. *Journal of Health Communication*, **10**, 433-450.
- Rimal, R. N. & Real, K. 2003 Understanding the influence of perceived norms on behaviors. *Communication Theory*, **13**, 184-203.
- Rivis, A. & Sheeran, P. 2003 Descriptive norms as an additional predictor in the theory of planned behavior: A meta-analysis. *Current Psychology: Developmental, Learning, Personality, Social*, **22**, 218-233.
- Rohdes, R. E. & Courneya, K. S. 2003 Investigating multiple components of attitude, subjective norm, and perceived control: An examination of the theory of planned behaviour in the exercise domain. *British Journal of Social Psychology*, **42**, 1, 129-146.
- Ross, L., Greene, D., & House, P. 1977 The "false consensus effect": An egocentric bias and attribution process. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 279-301.
- Schultz, P. W., Nolan, J. M., Cialdini, R. B., Goldstein, N. J., & Griskevicius, V. 2007 The constructive, destructive, and reconstructive power of social norms. *Psychological Science*, **18**, 429-434.
- Schwartz, S. H. 1973 Normative explanations of helping behavior: A critique, proposal, and empirical test. *Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 349-364.
- Schwartz, S. H. 1977 Normative influences on altruism. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 10, pp. 221-279). New York: Academic Press.
- Suls, J., Wan, C. K., & Sanders, G. S. 1988 False consensus and false uniqueness in estimating the prevalence of health-protective behaviors. *Journal of Applied Social Psychology*, **18**, 66-79.
- 館有紀子 1999 若者の迷惑行為と規範意識—親世代と子世代の比較— 日本社会心理学会第40回大会発表論文集, 254-255.
- 高木 彩・村田光二 2005 注目する規範の相違による社会的迷惑 社会心理学研究, **20**, 216-223.
- Warburton, J. & Terry, D. J. 2000 Volunteer decision making by older people: A test of revised theory of planned behavior. *Basic and Applied Social Psychology*, **22**, 3, 245-257.
- White, K. M., Terry, D. J., & Hogg, M. A. 1994 Safer sex behavior: The role of attitudes, norms, and control factors. *Journal of Applied Social Psychology*, **24**, 2164-2192.
- 油尾聡子・吉田俊和 2009 迷惑抑止メッセージと記述的規範が社会的迷惑行為と感情に及ぼす効果 応用心理学研究, **34**, 155-165.

(受稿: 2011.8.19; 受理: 2012.6.6)